

生命のにぎわい通信

第74号：令和7年（2025年）4月 発行

発行：千葉県環境生活部自然保護課

生物多様性センター

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

（千葉県立中央博物館内）

TEL:043-265-3601 FAX:043-265-3615

URL:<https://www.bdcchiba.jp/monitor-index>E-mail: monitor@bdcchiba.jp

身近な鳥、スズメ

水ぬるみ木々の新芽が鮮やかな季節が到来しました。一年のうちで「生命のにぎわい」を最も感じる季節ではないでしょうか。2024年10月、環境省生物多様性センターが行っているモニタリングサイト1000(通称モニ1000)の調査結果で、私たちの慣れ親しんできた生き物たちの減少が報告されました。なかでも身近な鳥の代表ともいえるスズメの減少は、ニュースなどで大きく取り上げられました。人の生活する場に寄り添うように生きるスズメ。皆さまのお住まいの地域では、無事に子育てをしているのでしょうか。

スズメ *Passer montanus*



a0826



a0389



a0826

スズメの暮らし

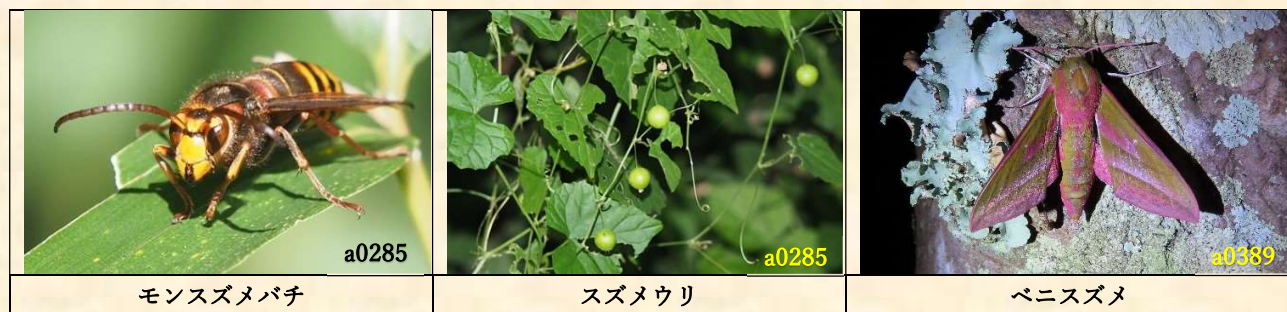
早春の2月頃につがいとなり、3月頃には巣を作り始めます。卵を産むのは4月下旬頃。1日1個、合計4～6個の卵を産みます。温め始めて2週間ほどでヒナが孵り、2～3週間ほどせつせと餌を運び育てて、5月下旬頃には巣立ちを迎えます。巣立ったヒナは、しばらく親鳥のそばにいて餌をもらいますが、6月頃になるとその年に巣立った若鳥で群れを作って暮らし始めます。巣立ちヒナの世話を終えた親鳥は、次の子育てに入り、8月の末頃までに2回もしくは3回子育てを行います。その後、秋になると食べ物の豊富な郊外の田畑などで、子育てを終えた親鳥も混ざった大きな群れをつくります。このとき、稲穂を食べるなどの農業被害をもたらすことがあります。冬、食べ物が少なくなると群れは分散し、農耕地から街中に帰ってきます。

スズメは小笠原諸島を除く全国に分布しています。留鳥と言われていますが、寒い地方で繁殖した親鳥の一部には、秋になると暖かい場所へ移動するものもいます。そして、暖かくなると再び帰ってきます。足輪を付けて行う過去の標識調査では、新潟県から岡山県まで、距離にして600kmも移動した例が確認されています。

スズメ以外のスズメ

スズメの名前はスズメ以外の生き物にも使われています。スズメダイ、スズメバチ、スズメノテッポウ、スズメガ。それぞれ、「小さい」、本来は小さい生き物が「スズメほども大きい」、「スズメが使いそうなサイズ」、「スズメに似た模様」という意味で使われており、スズメが私たちの生活に溶け込んでいる様子がよくわかります。そういえば落語の枕にヤブ医者よりも下手な医者を「スズメ医者」と呼ぶ話がありました。その心は、「だんだんやぶに近づく」。

皆さまからの「スズメ」の写真を紹介します。写真右下は団員番号です。（千葉県生物多様性センター 松坂 麻美）



参考図書：岩波科学ライブラリー213 スズメ（岩波書店）、野鳥図鑑350（世界文化社）

最新の生物多様性に関する情報や各種講習会の情報は当センターと調査団のホームページをご覧ください

調査団:<https://www.bdcchiba.jp/monitor-index> 生物多様性センター:<https://www.bdcchiba.jp>

古典文学と里山の生き物たちの世界

第二十八回 カジカガエル

Buergeria buergeri アオガエル科

詩人 大島 健夫

日本の古典文学には、様々な生き物たちが様々な形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生き物とかかわり、その姿に何を見ていたのでしょうか。この連載では、生物多様性センターに勤務している、ポエトリ・スラム W 杯日本代表詩人の大島健夫が、生命のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

905年に成立した『古今和歌集』は、日本最古の勅撰和歌集（天皇や上皇の直接の命令によって編纂された歌集）です。古今和歌集には、序文が二種類あります。漢文で書かれた『真名序』と、ひらがなで書かれた『仮名序』です。この仮名序を書いたのは、古今和歌集の編纂チームの中心的存在であった紀貫之でした。当時30代で、宮中の図書館の司書のような仕事をしていた彼は、歌人としては既に名声を確立していました。流麗で力強く、かつ熱い魂のこもった言葉でつづられた仮名序は、日本文学史上に燦然と輝く名文です。それはこんなふうに始まります。

やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聴けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける・・・

（※原文はすべてかなですが、読みやすいように漢字書き下しにしています）

ここで、ウグイスと並んで「その声を聴けば、およそこの世で歌を詠みたくない者など、いないだろう」とまで言われているカエルは、山地の溪流にすむカジカガエルのことです。高く美しい声で鳴くこのカエルは、昔から人々に親しまれてきました。間違いなく、日本文学に最も多く登場する両生類でしょう。カジカガエルは千葉県でも房総丘陵の溪流沿いに生息しており、春から夏にかけては、川の中の石の上でパートナーを求めて鳴く姿を見、その声を耳にすることができます。

紀貫之は、文学者としては同時代から現代に至るまで圧倒的な評価を受けていましたが、その一方で一生の間、貴族としての官位は低いものでした。老境に至ってから土佐守（いまの高知県の知事）に任ぜられて四国に赴任した彼は、有名な『土佐日記』を著しました。そこには、望郷の念や、土佐で亡くなった娘への愛情と悲しみがつづられています。高知県は清流が多く、たくさんのカジカガエルが生息しています。その声は、人生の終盤にさしかかった紀貫之の心に何を思い起こさせていたのでしょうか。



画 齋藤倫瑠

<これからの季節に観察できる生き物>

○調査対象種:ヒガシニホントカゲ、カワセミ、キジ、サワガニ、モリアオガエルなど

○調査対象種以外

*渡りのヒタキ類、サシバなどの猛禽類

*各種昆虫、両生類、爬虫類など

*希少生物(生息地・生息数が減少している生物)

外来生物の報告も受け付けています。

調査対象種以外は種の確認が難しいため、できるだけ写真の添付をお願いします。

「生命のにぎわい調査団 現地研修会」のご案内

初夏の梅ヶ瀬溪谷で生き物を観察しよう！

梅ヶ瀬溪谷は、養老川支流の梅ヶ瀬川により形成された溪谷で、淡水魚類や両生類・爬虫類等の様々な生き物が生息しています。今回の研修では初夏の梅ヶ瀬溪谷で採集等を行いながら生き物を観察します。

●開催日(雨天中止)

令和7年5月31日(土)9時30分～11時30分(予定)

●定員:30名(申込者多数の場合は抽選)

●対象:団員、小学生以上(要保護者同伴)

●申込締切:令和7年5月21日(水)必着(メール、郵送またはFAX)

●詳細は申込案内書をご覧ください